

---

# 遠坂、風邪をひく

kawajanz

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遠坂、風邪をひく

### 【Zコード】

Z57490

### 【作者名】

kawa-jan

### 【あらすじ】

自サイトで掲載中の Fate/stay night 短編小説です。

士郎と凛のクリスマス短編です。あまあま恋愛ラブストーリーです。情動のままに書きました。

もうクリスマスまであと一週間になる。そんな、とある休日。わたくしと士郎は、デートの約束をしていた。

「うう。なんでこんな日に、風邪をひくのよ」

とっても大事な日。あの朴念仁が、自分からデートに誘つてくるなんてとんでもなく珍しいというのに、そんな日に限つてわたしは風邪をひいた。普段は完璧なのに、大事なときに大失敗をしきかすという遠坂の呪いが、またもわたしを苦しめるのだろうか。

「そろそろ、待ち合わせの時間が。もう士郎も家を出ちゃつただろうし、今日は誤魔化すしかないか」

わたしは、昨日のうちに用意しておいた服に着替え、外出の準備を手早く済ませた。そして、予定通りの時間に遠坂邸を後にして、

「士郎はまだ、来てないか」

わたしが設定した待ち合わせの場所は冬木でも定番の待ち合わせスポットで、休日なら人で賑わうはずなのだが、待ち合わせの時間を早めに設定したせいか人はまばらであつた。士郎の姿もまだなかつた。

「まだ8時か。……つて、8時……！」

おかしい。わたしが設定した待ち合わせ時間は9時だったはずで、わたしが家を出た時間も8時半過ぎだったはずだ。

「そうだった。家の時計が一時間進んでるんだった」

今日はついてない。風邪だというのに、待ち合わせ時間の一時間前に来るし。全くもって、馬鹿としか言いようがない。

「仕方がないか。士郎もいつも通り早めに来るだろうし、ここで待つてればいいかな」

雪も降るかと予想された日に、わたしは外でずっと士郎の到着を待っていた。

- × -

外で士郎を待ち続けて45分ぐらいが経つだらうか、ようやくわたしの名前を呼ぶ声が聞こえた。

「遠坂、待つたか？」

士郎の姿が見えた瞬間、嬉しさがこみ上げてきた。わたしは魔術師として人間的な感情はできるだけ抑えようと努力してきた。しかし、こんな場面ほどわたしが人間なのだと、女なのだと実感させられる事はない。わたしは、もう半ば無意識にお決まりの返事をしていた。

「ううん。今来たところよ」

実際はわたしがここに来てから45分も経っている。体もそろそろ限界だった。全身が震えだしている。心とは裏腹に、体は軽い嘘もつき通せないほどに弱っているようだった。

「嘘言つな。本当に大丈夫か遠坂？」

先ほどから頭がぼわんぼわんとしている。足下も少しフラフラとして不安定だ。

「大丈夫よ。早く買い物に行きましょ」

強がっては見せるが、どうやら本当に限界のようだ。士郎の側に近寄ったところで体から力が抜け、士郎にもたれ掛かるように倒れてしまった。

「遠坂！しつかりしろ！…」

返事しようにも口が開かない。次第に視界が薄れていき、わたしは暗闇の中に墮ちていった。

- × - × - × - × - × - × - × - × - × - × - × - × - × -

目が覚めるとわたしは病室にいた。

「……しつづく」

ベッドで横になるわたしの隣には、椅子に座り両手でわたしの手

を握ってくれて『いる』士郎の姿があった。

「遠坂……よかつた。意識が戻ったんだな」

どうやらわたしは意識を失っていたらしい。いつたいどうじてこのような状況になってしまったのか。わたしは確か、士郎とデートをするために待ち合わせをしていたんじや……

「突然倒れるから、心配したんだぞ……まったく、具合が悪いなら無理しないで俺に……」

「士郎、今何時？」

「……午後3時。遠坂が倒れてからもう約6時間が経つてる」

「……そつか。わたし、自分で士郎との時間を潰しちやつたんだ」

ずっと前からこの日を楽しみにしていたのに……。なんでわたしは、『』いう二つ時に限つて……。

「ああ。残念だけど今田の『』テートは中止だな。医者は貧血だつて言つてた。意識を失つたけど、今日おとなしくしてれば明日には退院できるつても。ただ、いつまでたつても日を覚まさないから、俺は心配したんだぞ」

でも、士郎はずつとわたしの側にいて手を握つてくれたんだ。そう思つと、嬉しい気持ちで『』ぱいになつた。

「これで少しば、アンタの無茶を見守らなくちゃならないわたしの気持ちがわかつたでしょ？」

「…………」

「無言」なる士郎。口元まで顕著な反応を見せると、うよつと嬉しくなる。

「ねえ、士郎」

「なにや？」

「うよつと、顔寄せてくれる？」

士郎がわたしの言葉に応えて、顔を寄せてくれた。わたしはそつと上体起にして、士郎の頬に口づけをした。

「わたしの所為でテートが台無になっちゃって、ゴメン。それと、今旦はずっと側についてくれてありがとう」

士郎はしばし呆然としていた。そんな士郎を眺めて楽しんでいた、斜め後方から一番聞きたくない声が聞こえてきた。

「うわー。彼氏のいないあたしたちにやしまで見せつけるとは、さすが遠坂だな」

よりにもよって、わたしの親友旦つ好敵手である美綴綾子が立っていた。

「心配して揃しました。わたし帰つてもいいですか？」

そして、唯一血の繋がった肉親である妹の桜まで立っていた。

「綾子と桜もいたんだ」

苦し紛れの一言は、わたしの首を一層苦しめる」ととなつた。

「やっぱり、遠坂さんにはお灸を据えた方がいいのかね？」

「そうですね。姉さんをこれ以上甘やかしたらいけない」と思っています

最近、Jの一人の意氣投合ぶりが見ていて怖い。同じ部に所属しているとはいえ、いつの間にJさんなに息が合つてきたのだろうか。

「悪かつたわよ。まさか土郎以外にも来てくれてたなんて思わなかつたから……」

士郎の名を口にしたときの桜の視線が怖い。

「衛宮、悪いがさつきのは無しにしないか?」

「えっ? いや、それは困るんだけど……」

何の話だろ？なんか嫌な予感がする。

「元々、今日先輩と姉さんがデートするなんて、わたし聞かされていませんからね」

「確かにそうだけどさ」

なんだかわたしだけ話題から取り残されている。不満の顔を士郎に向けた。

「遠坂、可愛くないぞ」

「姉さん、ずるいです」

今日は何をしてもう一人に非難されるのだろうか。

「もう、さつきから何なのよ。わたしに恨みでもあるわけ?」

「いつのこと、やけくそになつてみる。既に、頭の中も風邪のおかげか知らないが、わけがわからなくなつていた。

「そりや、あらに決まつてゐるじやん」

「あらに決まつてしまふ

二人とも即答。

「何よ

とつあえず、士郎の方を睨んでみた。

「いや、それはだな……」

「アンタが今日倒れたから、24日に予定していたクリスマスパー

「先輩がどうしてもって言うから、わたしも了承したんですけど  
、あたしは賛成してあげたんだがね」

「先輩がどうしてもって言うから、わたしも了承したんですけど」

「パーティーの日にちを延期つて、つまり……」

「あたしは、遠坂次第かな」

「一人の気持ちが心に染みる。」

「参ったわ。わたしの負け。一人には貸しができたわね。ありがと  
う」

「わかつてくれれば、あたしはそれでいいんだ」

「こんなことは、今回限りですかうね」

「不覚にも泣きそうになってしまった。涙を堪え、ベットに仰向け  
になった。

「それじゃあ、あたしらは帰るぞ」

「姉さん、お大事に」

「そうして、二人は病室を去っていった。」

「人がいなくなつてから少し経つて、士郎が口を開いた。

「そういうわけでさ、遠坂

わたしはベットに仰向けになりながら、士郎の瞳を見つめた。

「24日は予定を空けといてくれないかな？」

「ええ、もちろんよ」

そう言つて、わたしは士郎に抱きついた。さつきまでの絶望感が嘘みたいに、わたしは幸せな気持ちに満たされていた。たまには風邪になつてみるものなのかも知れない。

少し経つてから、廊下でぶつくさ文句を言つ櫻の声が聞こえた気がしたが、それは気づかなかつたことにしておこう。とにかく、二人とも本当にありがとう。そして士郎、大好きだよ。

- × - × - × - × - × - × - × - × - × - × - × - × - × -

（後日談）

ついに今日はクリスマスイヴだ。何が嬉しいかって、今日は一日士郎とデートができるのだ。嬉しさのあまり、待ち合わせの20分前には既に待ち合わせ場所に着いていた。

「遠坂早いな。今日は倒れたりしないよな？」

「当たり前じゃない。体調は万全よ」

「それも怖いな」

「なんか言つた？」

「言つてません」

そんな会話の後、士郎は自然と手を握つてきた。わたしはそのまま士郎の隣に寄り添い、一人で歩き出した。士郎の手はとても暖かかった。

ショッピングをしたり、カフェテリアでお茶を飲んだりと、特別なことはせず、わたしたちは純粹にデートを楽しんだ。クリスマスイヴということもあり街は人であふれかえっていたが、士郎といたからか苦痛は感じなかつた。ただ、夕食に入る店を決めようとしたときにはどの店も満席だったのが誤算だつた。

「予約を取つておるべきだつたわね」

「やうだな。でも過ぎてしまつたことはじょいつがないわ」

「やうだけど……」

せつかくのデートなのに、雰囲気が台無しだ。

「それこそ、俺としては家で遠坂と一緒に夕飯を作つて食べる方が楽しいと思つ」

実はわたしも同じことを考えていた。結果的には、悪くないなど思っていた。

「うひして一人でゆっくり歩いて帰ることも、普段はあんまりないしな」

新都からわたしたちは徒歩で土郎の家に向かっていた。そういえば、こうやって落ち着いて一人で歩いて帰ることは今までなかつたかもしれない。

「墓地に寄つてもいいかしら」

ふと、父様の眠る墓に寄りたくなった。

「いいぞ」

一言だけそう言つて、土郎は黙つてわたしに付いてくれた。

墓地のに着き、わたしは父と母の墓の前に立ち止まつた。わたしにはもう両親との思いではあまり残されていなかつた。元々父様は魔術師の鏡のような人だつたみたいなので、一緒に遊んだ記憶はほとんどない。それでも、両親がわたしと桜にむけてくれた笑顔はなんとなくだが覚えている。

「父様、ごめんなさい。わたし、結局聖杯を手に入れることはできませんでした。ただ、魔道の探究は続けています。時計塔で、第二魔法の研究をやろうと思っています」

第一魔法の成就は、遠坂の悲願でもある。今では土郎という心強いパートナーもいる。第一魔法という途方もない目標でも、一人で

進めば決して辿り着けないことは無い。

「お父様、お母様、ここにいるのがわたしの恋人です。わたしは彼と一緒にこの先の人生を歩んでいきたいと思っています」

「はじめまして、衛宮士郎と申します。遠坂には、本当にお世話になっています。そしてこれからもずっと、遠坂と一緒にいたいと思っています」

士郎の顔を見つめた。そして、わたしは士郎に口づけをした。その最中、士郎はわたしの手に何かを握らせた。

「俺からのクリスマスプレゼントだ」

手を開くと、赤い宝石が埋め込まれた剣をモチーフにした首飾りだった。

「この剣って確か」

「俺がよく使う双剣の片方で、莫耶っていうんだ。干将の首飾りも作つたけど、それは俺が持つてる」

干将・莫耶は夫婦剣であり、何かのトラブルで紛失しても必ず持ち主の元に戻る、という強い絆が存在する。

「……それに、この宝石」

「ああ。俺がランサーに殺されて遠坂が生き返らせてくれた時に、遠坂が忘れていたペンダントから少し削ったんだ」

父様との思い出が詰まつた赤い宝石が、莫耶の中央に刻まれていた。

「俺が投影したもので悪いんだけじゃ、この莫耶には俺の遠坂への想いが詰まつてゐる。干将と莫耶は一つが揃つてこそその双剣なんだ。遠坂のお父さんの墓の前で言うのは恥ずかしいけど、俺とずっと一緒にいてほしうつていう気持ちがこもつてゐる」

「嬉しい。肌身離さず身に着けるわ」

そう言つのが精一杯だった。嬉しさのあまり、涙が止めどなく溢れてきた。父様の前では、魔術師然としていようと心がけていたが、もはやわたしは士郎の彼女でしかなかつた。

「遠坂、落ち着いたら帰ろうつか」

「朴念仁、もう少し黙つて胸を貸しなさいよ」

士郎との幸せの日々はまだ始まつたばかりなのである。

End

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5749o/>

---

遠坂、風邪をひく

2010年11月1日18時01分発行